

膵臓がん



早期発見が難しく、
浸潤、転移しやすい膵臓がんは、
もっとも手強いがんのひとつです。
このような難治性のがんに対しては、
患者が理解を深め、疑わしい場合は、
専門家のいる施設で
早めに受診することが大切です。
そのためにはどうしたら良いか、
膵臓がん治療に強く、
実力ある施設または病院として名高い、
がん・感染症センター都立駒込病院
肝胆膵外科医長の
本田五郎先生にお話を伺いました。



よくある質問・素朴な疑問 膵臓がんQ&A

- Q** 膵臓がんが治りにくいのはなぜですか？
A 特徴的な症状が乏しいため発見が遅れ、膵臓がんと診断されたときには、手術不能という場合が多く、切除しても再発する可能性が高いからです。
- Q** 早期発見のためにはどうしたらよいのでしょうか？
A 膵臓がんには有効な検診システムがなく、人間ドックで見つかるケースは一握りにすぎません。膵臓がんに関連の深い糖尿病の発症やちょっとした症状を見逃さずに、膵臓をターゲットにした検査を受けることが早期発見の手掛かりになります。また、すでに糖尿病や慢性膵炎をもっている人は、定期的に膵臓をターゲットにした検査を受けておくことが大切です。
- Q** どのような症状があったら検査を受けるべきでしょうか？
A ・吐き気、嘔吐・食欲減退・腹部膨満
 ・背部や腹部の痛み・黄疸・顕著な体重減少
 ・膵炎や糖尿病の急な発症や悪化



本田五郎 (ほんだ ごろう)
 ・がん・感染症センター
 都立駒込病院 肝胆膵外科医長
 ・日本肝胆膵外科評議員
 高度技能指導医

膵臓はどのような臓器？

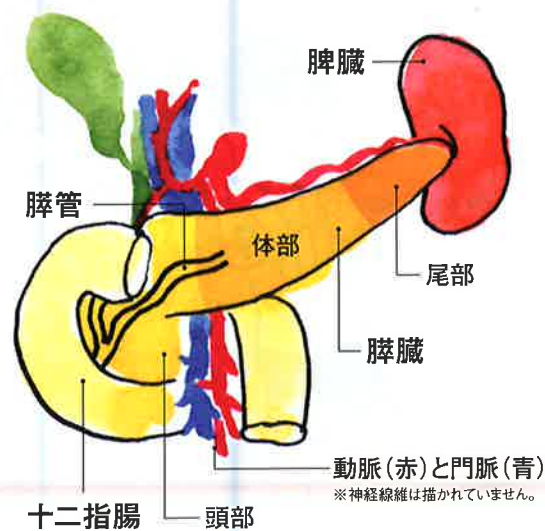
【図1】をご覧ください。膵臓は胃の後ろ側に位置し、腹腔（お腹の臓器が収められたスペース）の背側の壁に張り付いています。そして【図2】のように、薄くて細長い形をしており、魚の頭のように少し膨らんでいる部分は頭部、真ん中は体部、細長くなっている部分は尾部と呼ばれています。頭部は十二指腸と、尾部は膵臓と接しています。

して、内臓の働きを微調整するための自律神経の線維がこの動脈を取り囲んでおり、そこから膵臓に向かって皆さんの神経線維が入り込んでいます。

膵臓の役割と膵臓がんの種類

膵臓の役割には、内分泌機能と外分泌機能があります。

・内分泌機能：ホルモンの分泌
 インスリンなどの生理活性物質（ホルモン）を血液中に分泌して血糖値の調節を行います。インスリンの分泌が少なくなると糖尿病を発症します。内分泌機能を持った細胞から発生するが



【図2.膵臓とその周囲の解剖(胃をとりはずした状態)】

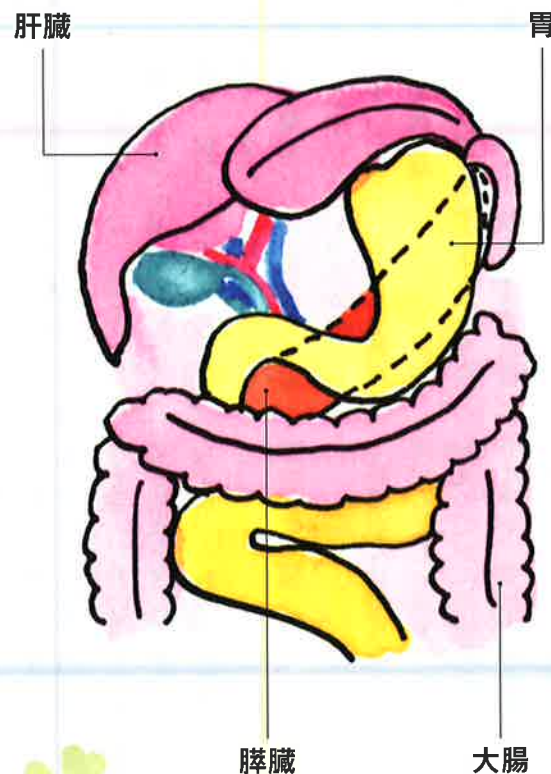
・外分泌機能：消化液の分泌
 膵液と呼ばれる消化酵素を十二指腸に分泌しておもに食物中の脂肪分を分解します。膵臓にできるがんの約90%が、この外分泌機能をもった細胞から発生します。そしてそのほとんどが膵液を十二指腸に流す膵管の細胞から発生する膵臓がんです。一般に膵臓がんと呼ばれるのはこの膵管がんです。

膵臓がんの症状

膵臓がんの症状としては、黄疸、お腹・背中・腰の痛みや体重減少などがあげられます。膵臓がんは糖尿病との関係が深い病気で、糖尿病にかかっている人は注意が必要といわれています。少なくとも新たに糖尿病を発症した時や糖尿病の状態が急にひどくなる時は、その都度膵臓がんの検査を受けることをおすすめします。

膵臓がんの疫学

わが国の膵臓がん罹患率はやや増加の傾向にあります。毎年二万人以上の



【図1.膵臓の位置】

早期発見が難しい理由

ほとんどの膵臓がんは、見つかった時点で膵臓の外まで広がっていたり、膵臓から離れた臓器にすでに転移を起しています。また、しばしば膵臓を取り囲む神経線維にしみこむように広がります。つまり、小さいうちから周囲に広がりやすいのです。しかも手軽にできる超音波画像検査では胃や大腸が邪魔になり、十分な観察が困難で、早期の膵臓がんを効率よく検出できる血液検査もないため、見つけにくいのです。しかし、最近ではCTやMRIなど

の精密画像検査が発達してきたおかげで、膵臓の嚢胞性病変が偶然に見つかることが多くなりました。嚢胞とは液体を含んだ袋のことです。嚢胞のなかでも粘液を含んだものは早期の膵臓がんや前がん病変の可能性があります。

診断と治療

膵臓がんは発見だけでなく、診断の確定も難しい病気です。特殊な内視鏡を使ってがん細胞を採取する方法がありますが、実はがん細胞がない（良性の病気）のか、がん細胞がうまく取れないのか、判断が難しいことがし

ばしばあります。それでも膵臓がんを否定することができない場合には、手術をおすすめすることがあります。

治療法は、手術（切除）・放射線治療・抗がん剤治療が代表的です。

手術では、膵臓がんを含めた膵臓の一部ないし全部とその周囲を摘出し、再発率を下げるために手術後に抗がん剤治療を行います。切除できた場合、膵臓がんを克服できる可能性が高くなります。

放射線治療では、膵臓がんとその周囲を狙って放射線を照射し、必ず抗がん剤を組み合わせて行います。放射線治療や抗がん剤治療は、がんを縮小さ

せて進行を遅らせ、痛みなどの症状を緩和することができます。また、手術と組み合わせることでもがんをコントロールでき、より高い治療効果が期待できます。

遠隔転移を起こしている場合には全身治療である抗がん剤治療のみが選択されます。これが現在の標準治療です。

膵臓がん治療最前線

膵臓がんは手術が成功しても、目に見えないがん細胞が手術の時すでに全身に広がっている場合が多く、高率に再発してしまいます。そこで最近、一部の専門病院では抗がん剤治療や放射線治療を手術前に行う方法が試されています。目に見えないけれども、

目に見えないけれども、縮小しているがん細胞を手術の前に取り締まり、膵臓がんの本体を小さくすることを目標としています。これにより、切除不能の腫瘍が切除可能になったり、手術の治癒度が上がったり、治療全体の完遂率が上がることが期待されます。

都立駒込病院では、約三年前から先進的にこの治療法を行っており、以前より再発率が下がっている印象です。今後も、専門病院の実績と専門医の経験をもとに、従来の手術の安全性や確実性を維持しながら、新しい技術を取り入れ、より効果的な治療法を提供することに努めていきます。

特 健
集 康

生活習慣アドバイス

- ・お酒は控えましょう。
- ・禁煙しましょう。
- ・高脂肪・高カロリー食を控え、野菜を積極的に食べましょう。
- ・適度な運動を心がけましょう。
- ・糖尿病や慢性膵炎の人、急性膵炎にかかったことのある人は医師に相談しましょう。

